



ヒビンパ

清水義範

ビビンバ

しみずよしおり
清水義範

© Yoshinori Shimizu 1993

1993年6月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185412-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

ビビンパ

講談社

目次

ビビンバ

7

御両家

31

謹賀新年

59

シンさん

85

猿取佐助

97

リモコン・ドラマ

107

波瀾の人生

125

平成元年の十大ニュース

149

三劫無勝負

173

兇のチャット

204

あとがき

205

解説

208

関川夏央

ビ
ビ
ン
パ

ビ
ビ
ン
パ。

1

「ほうら、ほら、空^あいてる席あるよ。な、この時間ならかえってそういうもんなんだよ、よしよし、あがれあがれ」

池^{いけ}辺^べ健次郎は号令をかけるようにそう言った。

「靴^{くつ}脱^ぬいであがるの」

と靖^{やす}子^こが不平っぽく言う。

「そのほうが落ちついていいじゃないか。はい、あがる。伸^の幸^{ゆき}も由^ゆ香^かも早く。そこしかテ—ブル空いてないんだからな」

池^{いけ}辺^べ家の家族四人は、中央に四角い窪^{くぼ}みがあつて、一段低^ひく格^{こう}子^し風の焼^やき網^{あみ}がセツトされたテ—ブルを囲^{かこ}んで、座布^{ざふ}団^{だん}の上にぺたっとすわりこむ。

「由香こっちへ来なさい。お父さんの隣だ」

小学校六年生で、このところやけにころころと太ってきた娘を、父は自分の横にすわらせる。彼の正面に妻の靖子、由香の前が中三の息子、伸幸という布陣になる。

「いらっしやいませ」

と言つて、十七、八のジーンズ姿の女の子が、畳に膝をついておしぼりとメニューを手渡す。その一冊を健次郎が広げ、もうひとつは靖子が広げる。子供たちはそれを横からのぞきこむ。

住宅街にある、小さな商店街。一応はすずらん型の街灯もあって、そこには梅の町商店街、と書かれている。そこに、最近開店した焼肉レストラン、山溪園、がある。

以前は、サンダル、スリッパを主な取扱商品としていた、サン・シューズという靴屋だったがそれが開店後二年でつぶれて、この焼肉レストランに変わった。

そして、今度はなかなかの繁盛である。日曜日の午後六時半というこの時間、池辺家がテーブルについて、八つの席にはすべて客がついている。

「よし、何でも好きなもの食べろよ。たまにお父さんと外で食べる時くらいは、遠慮しないでいい。ガーンと食べろ」

「おれ、カルビ」

息子の伸幸が変に几帳面におしぼりで手をぬぐって、ぼそつ、と言った。

「もちろんだ。まずカルビだよな。よしえーと、上カルビいこう。上カルビをとりあえず五人前くらいいくか。それでまた、追加すりゃいいんだから」

「この子たち、本当にすごく食べるわよ」

靖子は、そんな勿体ない、という顔をして言った。

「いいんだよ、今日は。それとまずとりあえず、ビールだ。えっと、生もあるのか。どうするか。ま、瓶でいいか。瓶でビールをとりあえず二本」

「一本ずつでいいじゃない」

「最初は二本だよ。お前も少しは飲むだろ。それからえーと、何を注文するか。ユツケか。ユツケ食べたことあるか」

子供たちにきく。由香が、ない、と答えた。伸幸はぶすつと黙っている。

「じゃあいつべん体験してみなさい。お肉の刺身のようなものだ。おいしいよ。ユツケを一人前いこう。それから、タンだな」

「私、タンはいや。食べられないの」

靖子がそう言った。

「おれも食わねえよ」

伸幸が言った。

「うまいんだぞ。由香は食べるだろ」

「食べたことないもん」

「おいしいから食べようよ。ね、タンを一人前。えーと、野菜がいるな。野菜焼きも頼もう。二人前くらいいるな」

「焼肉頼むと、ちゃんとそれにネギとピーマンくらいいついてるのよ。だから二人前もいらないわよ」

「あんまりみみっちいことを言うなよ」

「だって残してもしょうがないじゃない。それより私、何かサラダのようなもの食べたいわ」

「あ、いいよ。ほら、どれにする。いろいろあるぞ」

「この、大根サラダっていうのでもいいわ」

「あつ、これだこれ。サンチュ。これあれだろ、焼肉を巻いて食べる菜っ葉だろう。これをとらなきゃいかんよ。焼肉をこれで巻いて食べなきゃモグリなんだ。これいこう。これは二人前くらいいるな」

「もうそのくらいでいいんじゃない」

靖子はちよつとはらはらしたように言う。

「とりあえずはな。で、食事物はあとで頼めばいい。おれはビビンバだ」

「ビビンバって、どういうのだったっけ」

由香が父に尋ねた。

「ご飯の上に、何種類かのおかずがのつてるやつだよ。五目ご飯のようなやつだ」

「ああ、知ってる」

「ビビンバはおいしいぞ。あとご飯ものではね、クッパというのものもある。冷麺もあるよ」

「あとで、まだ食べられるようなら頼めばいいのよ」

靖子がそう言った。

「そうだ。とりあえずはカルビだね。焼肉だ。えーと、そんなところでいいのかな。あ、ビールのつまみにキムチもらうか。いや、それならカクテキのほうがいいな。カクテキひとついいか。みんなはいいか。キムチかカクテキほしい者、いないか」

まるで点呼をとる学校の先生のように健次郎は言った。

「カクテキってどういうの」

由香は尋ねる。

伸幸は、おれ関係ないぜ、という顔をしている。

「大根のキムチだよ」

「じゃあいらない」

「では、カクテキは一人前。うん。まずはそういうことでもいいこう。えと、あ、ちょっと」

健次郎は忙しそうに立ち働く女の子を呼びつけた。そして、注文品を相手にきちんと伝達するのが、また一騒動であった。

2

子供たちの肉を食べる速度というのが、あきれるほどすさまじいのである。しばらく靖子は、休む暇なくカルビを焼き続けなければならなかった。

「野菜も食べなきや駄目よ。ほら、ネギ焼けてるから食べなさい」

「ネギいらねえよ」

伸幸はひたすら肉ばかりを食べる。

「この葉っぱにね、こうやって焼けた肉をのせて、巻いて食べるとおいしいんだ。野菜も食べて、栄養のバランスがいい」

健次郎は実演してみせた。娘の由香はすぐ真似をする。

「な、おいしいだろ」

「うん」

で、カクテキでビールを飲む。こっちはどうだ、うまいか、一度食べてみるよ、という発言が続く。満足そうである。

由香は何でも平気で食べてみて、おいしい、と言う。伸幸は、知ってる味じゃないものは死んでも食べないぞ、という態度で、ただ肉だけを食べる。

「しかしこれ、いい仕掛けになったよね。ほら、ここんとこから煙を吸いこむだろう。ファンをまわしてるんだろうな、どこかで。だから煙がたちこめないわな。こういうのができる前の昔の焼肉屋というのは大変だったんだ」

健次郎は自分でビールを注ぎ足す。

「もう、うわーっと店中に煙がたちこめちゃってだね、壁なんか茶色くなっちゃうんだよ。それが今はこのおかげで、店の中もきれいだわな」

「だからこの頃焼肉ってはやつてゐるのよね」

靖子はネギの焼けたのを食べながらそう言った。

「うん。若者にもうけるようなおしゃれな店ということになってくるわけだ」

「タレントでも焼肉好きな人が多いよ」

由香はそう言った。

「森山さおりとか、西村明子とかが言つてたもん。好きな食べ物は焼肉だつて」

「若い人にはこのポリウム感がいいんだわね」

「結局、今、焼肉がおしゃれだということになっているからなんだよ。でもって、それというのも、この煙を吸いこむガスコンロだわな。これのおかげだ。これのおかげで、そういう流行になったわけだ。これがなくてだよ、煙がもうもうだったら、そうはいかん」

健次郎はやけに力説するのであった。

「あんたも葉っぱ巻いて食べなさい。これ、サニーレタスよ。いつも平気で食べてるものじゃない」

と母に言われて、伸幸はその方式をやつと取り入れる。

「これ、サニーレタスじゃないだろう」

健次郎は不思議そうに言った。

「サンチュっていうもんだろ。韓国の菜っ葉だ」

「サニーレタスよ。それをサンチュって言つてゐるの」

「そんなことあるか。サニーレタスのことを韓国語でサンチュっていうのか」

「そうじゃなくて、そんな菜っ葉こっちにはないからこれで代用してるんでしょ」

「それで、名前だけはもとの名を使ってるわけか。そりゃ、詐欺だよなあ。しかし、どう見ても確かにサニーレタスだな」

「私、サニーレタス好きだよ」

由香がそう言ったので、健次郎も一応その件については納得することにした。

「これ、焼けてるよ。焦げちゃう」

「お前も食べなさいよ」

「食べてるわよ」

「そうか。じゃあそれはおれが食べよう」

「この大根サラダおいしいわよ」

「どれ。なるほど、こういう味か」

「おいしいでしょう」

「うん。これ、ラー油入ってるのかな」

「違うでしょう。唐芥子がきいてるのよ」

「唐芥子か。そーいやそーいかな」

「私もそれ食べたい」

由香がそう言って、腕をのばした。